

様式（文章部分）

■研究課題名

【RFb-11T1】非特定汚染源からの流出負荷量の推計手法に関する研究

■研究の目的

内湾や湖沼の栄養塩濃度は依然減少していない状況にあり、この対策が進んでいない原因として、森林、農地、都市域など非特定汚染源からの負荷量の寄与の実態が不明であることが指摘されている。現在、総量規制に用いられている原単位の情報は古い調査データに基づくものであり、また内湾に係る原単位は総量規制開始時から変更されておらず、最新の情報に基づき実態を反映したものに改める必要がある。そこで、非特定汚染源からの汚濁負荷量を適正に把握・評価し、湖沼・内湾への全流入負荷量に対する非特定汚染源の位置づけを最新の科学的知見をもとに明確にすることを目的に、本研究では国内外の文献から原単位に関連した情報を整理・統合して非特定汚染源の原単位に関するデータベースを作成する。さらに今まで用いられている非特定汚染源の原単位の根拠を明確にするとともに、現在の知見に基づいてその妥当性を検討する。

■研究項目及び実施体制（◎は研究代表者）

非特定汚染源からの流出負荷量の推計手法に関する研究

（◎古米弘明／社団法人日本水環境学会（東京大学大学院工学研究科））

（ 駒井幸雄／社団法人日本水環境学会（大阪工業大学工学部））

（ 井上隆信／社団法人日本水環境学会（豊橋技術科学大学大学院工学系研究科））

（ 山田俊郎／社団法人日本水環境学会（岐阜大学工学部））

■研究の内容及び主要成果

非特定汚染源を市街地、農地、森林の3つに分けて、それぞれの汚濁負荷情報に関する国内外の文献情報を収集するとともに、文献から原単位の推定可能な国内観測データを収集し、負荷量・原単位に関する情報と流域情報、気象条件、調査方法など付随条件を整理し、原単位の統合データベースを構築することができた。また大気降下による負荷に関する情報も収集を行った。それぞれの文献や情報から負荷量変動要因について分析し、最も確からしい原単位算定手法の開発に向けての問題点を明確にし、またこれまでの非特定汚染における原単位の考え方を整理し、これまでの原単位の算定手法や水域管理における原単位法の適用の現状と課題について明らかにし、非特定汚染源制御に関する現実的な方法論について検討した。

■見込まれる環境政策への貢献


文献から得られた情報をデータベース化するとともに、成果に関するホームページを作成して公開した。このデータベースを基に、非特定汚染源負荷を踏まえた確実かつ効果的な負荷削減対策の策定や、データベースに基づく地域社会と連携した非特定汚染源制御のより現実的な方法論策定に貢献することができる。

■主な発表論文

特になし

様式 (イメージ図部分)

【RFb-11T1】非特定汚染源からの流出負荷量の推計手法に関する研究

- 背景
- ・内湾や湖沼の栄養塩濃度は、依然減少していない。
 - ・森林、農地、市街地などの非特定汚染源からの負荷量寄与の実態が不明である。
 - ・総量規制での原単位の情報が古い調査データに基づくものである。
- 

目的

非特定汚染源からの汚濁負荷量を適正に把握・評価し、湖沼・内湾への全流入負荷量に対する非特定汚染源の位置づけを、最新の科学的知見をもとに明確にする。

